

中国のほんの話 (30)

中国語圏で最も影響力を持つ
日本作家 村上春樹
蔭山 達弥

集英社の雑誌『すばる』8月号(平成17年8月1日発行)は「春樹(チュンシュー)」から「反日」まで」という表題で中国文学の現在を76ページにわたって特集している。特集の冒頭の一文に、この特集の内容紹介と目的が集約されている。

「春樹」というペンネームの作家が登場するほどの日本文学ブームが伝えられていた、中国。その中国を、「反日」の影が覆う。春樹、衛慧、潘向黎、戴来、余傑 「日本」に触れた小説を含め、中国若手作家たちの話題作・問題作を俯瞰。日中間を流れる地下水のゆくえと、その“温度差”を探る。

この特集の最初に登場するのが、2002年、長編小説『北京ドール 17歳の少女の残酷な青春の告白』が発禁処分となり、一躍時の人となった春樹(チュンシュー)である。衛慧の『上海ベビー』に続く若い女性作家の発禁騒動であった。彼女は1980年代生まれを代表する作家であり昨年2月には米誌「タイム」の表紙を飾り、欧米諸国でも注目の作家だ。訳者の泉京鹿が彼女のペンネームについてたずねた時、「村上春樹もいいけど、龍の方が好き」との答えが返ってきたそうである。

同特集の最後、東京大学の藤井省三教授は「ポスト鄧小平時代の文学における“絶対村上”と“反日”の情念」の中で次のように述べておられる。

「現在、村上春樹(1949～)は中国・香港・台湾・シンガポールという中国語圏で最も影響力を持つ外国作家、いや、最も読まれている作家、と言っても過言ではあるまい。(中略)中国では青島海洋大学外国語学院教授の林少華が89年以来、村上文学を一手に訳しているのだが、90年代末に上海で『ノルウェイの森』が爆発的に売れ始め、まもなく村上ブームは北京にも及んだ。2001年には上海訳文出版社が著作権を取得して、『アフターダーク』に到るまで村上のほぼ全作品を刊行し続け、『ノルウェイの森』の累積出版部数は2003年

3月で62万部に達したという。」

最新のデータでは『ノルウェイの森』は既に21回、版を重ね、他の作品をあわせるとざっと見

積もって、この3年間で村上作品は中国で200万冊刊行されたそうである。村上春樹と彼の『ノルウェイの森』は一種の文化記号となり、今や大学生、高校生、ホワイトカラー層など都市部の青年たちのホットな話題とキーワードである。

村上作品を翻訳している林少華は彼に会った時の印象を「村上春樹は大きな男の子だ」と述べている。林少華は吉林省の田舎で育った。二人の妹と三人の弟がいて貧しい生活を送った。そのころは一日中ほとんど話さなかったそうである。中学、大学と進んでも集団生活になじみず、誰とも友人にならなかつたらしい。村上春樹を翻訳している時だけ、時々ただ翻訳しているのではなくて、親友と腹打ち割って語り合うような、「一種の思いの丈を訴える感覚」があると言う。1987年に『ノルウェイの森』が日本で出版されると、当時大阪に留学し、中国の古典詩歌と日本の古典詩歌の比較の研究をしていた林少華は1989年に早速翻訳し中国に送った。自分の性格と村上作品の意気投合について、林少華は「一種の縁、一種の幸運な出会い」と言わざるをえないと言っている。林少華は村上作品の助けを借りて、自分の見解すなわち人、草花、弱い命に対する憐れみを書く。林少華は文学の最高の境地はやはり憐れみの心情だと考えている。彼は今の都市を描いた作品を嫌っている。「何がベビーだ、憐れみが足りないよ」と彼は言う。林少華は毎日夜8時になると机に向かい、11時半まで週末も日曜も関係なく翻訳に取り組む。林少華という最高の翻訳者を得て、村上文学はいま中国の若者に浸透していき、多くの「村上チルドレン」を生んでいる。(参考文献「南方人物週刊」2005年第14期)

かげやま たつや(助教授・中国文学)

